

樹木・花にまつわる物語

第5回 ネムノキ 合歡の木

河本義宣

『象瀉^{きさかた}や雨に西施^{せいし}がねぶの花』

芭蕉の「奥の細道」に出てくる一句です。“西施”って、何？ 誰？

その前にネムノキについて。江戸時代ネムの発音はネブと呼んでいたようです。マメ科の落葉高木で、原産地は日本、南アジアです。名前の由来は和名のネム、ネブは、夜になると葉が閉じること（就眠運動）に由来します。漢字名の「合歡木」は、中国でネムノキが夫婦円満の象徴とされていること



ネムノキ(Wikipediaから)

ことから付けられました。学名は *Albizia julibrissin* Durazz. (1772)。ヨーロッパにネムノキを紹介したイタリアの自然科学者 Albizzi への献名でしたが、命名者の Antonio Durazzini (18世紀のイタリアの植物学者) が、*Albizzia* とすべきところを *z* を1つ書き落として *Albizia* になったというエピソードが残っています。

話を西施に戻します。

「西施」は中国の歴史で紀元前500年ごろの、呉と越の抗争に登場する女性で、後世、中国四大美女と言われた一人です。江南の地、越の国西施村の村娘でしたが、若いころより美しいことで村中の評判でした。体が弱く、眉間にしわを寄せ、首を少し傾けて歩いていました。それがまた美しいと言うことで評判になりました。醜女^{しこめ}の女性が美人に見られたいと西施の真似をして歩いたという故事から、「顰^{ひそみ}になら^{なら}倣^{なら}う」という成句が出来たといわれています。

さて、呉越抗争の発端は国境を接する村の稲作時の水田の水引きのトラブルです。これまでの約束を破って勝手な振る舞いをしたので、相手方が役場に訴えます。埒が明かず、互いにお上に訴えました。解決せず遂に両国の戦争へと発展したのだそうです。

両国の戦いは勝ったり負けたりして何年間も続き、「臥薪嘗胆」の成語を生んだのはご存じのとおりです。

呉王・夫差^{ふさ}が勝って越王・勾踐^{こうせん}が捕えられて危うく殺されそうになった時、越国は呉国に服従を誓い、勾踐は命拾いをします。が、越国の重臣・范蠡^{はんらい}は更に策を練って、件^{くだん}の西施村の美女・西施に、「夫差に限りなく贅沢をさせて、呉の国力を削ぐよう計らってほしい」と密命を与え夫差に送りました。夫差は西施を迎えて、華美な暮らしに溺れ、その一方で覇者にならんとし、中原への度重なる

遠征軍を派遣したため国力が次第に消耗して行きました。苦節10年、越国は呉国に挑みます。范蠡は出兵に当たって部下に「如何なることがあっても西施を元気な姿でわしのところに連れてくるように」と厳命します。怒涛のごとく呉軍を襲った越軍は呉王・夫差^{ふさ}を姑蘇山^{こそざん}に追い詰め呉国は滅びました。

部下に伴われて范蠡の前に現れた西施は「これで良かったのですね」と一言、范蠡もまた西施に深くと頭をさげたとされています。范蠡は「飛鳥尽きて良弓蔵る」(用がなくなれば捨てられることのとえ)の言葉を残して、西施を伴って齊の国に行き、鶄夷^{いしひ}子皮と名乗って商売をし、数年を経ずして、巨万の富を築いたと伝わっています。



町田市薬師池公園にて。濡れると垂れる。(2015年筆者撮影)